

3-13 三浦半島変動地形調査（続報）

Morphotectonic Investigation in the Miura Peninsula (continued)

国土地理院地理調査部

Geographic Department, Geographical Survey Institute

前回¹⁾は、三浦半島南端部の、台地を開析する小さな谷に分布する完新世段丘について報告した。そのうちの一つについて、段丘面の形成年代を表わす資料が得られたので報告する。

第1図の×地点において、ハンドオーガーによる簡易ボーリングを実施したところ、地表下1.30 mまで細礫まじり砂層、その上位に泥炭層が堆積していることが明らかになった（第2図）。細礫まじり砂層には海水生種のケイソウ、海綿・放散虫の破片などが含まれているので、この層は海成層であると考えられる。この層の上に重なる泥炭層のうち、地表下1.15～1.20mの部分を採取し、¹⁴C法による絶対年代の測定を行ったところ、以下の結果を得た。

測定値 : 2,910 ± 90yr. B. P.

測定番号 : N - 3765

測定者 : 日本アイソトープ協会

測定資料 : 泥炭

試料採取者 : 熊木洋太・松島義章

試料採取地 : 神奈川県三浦市毘沙門

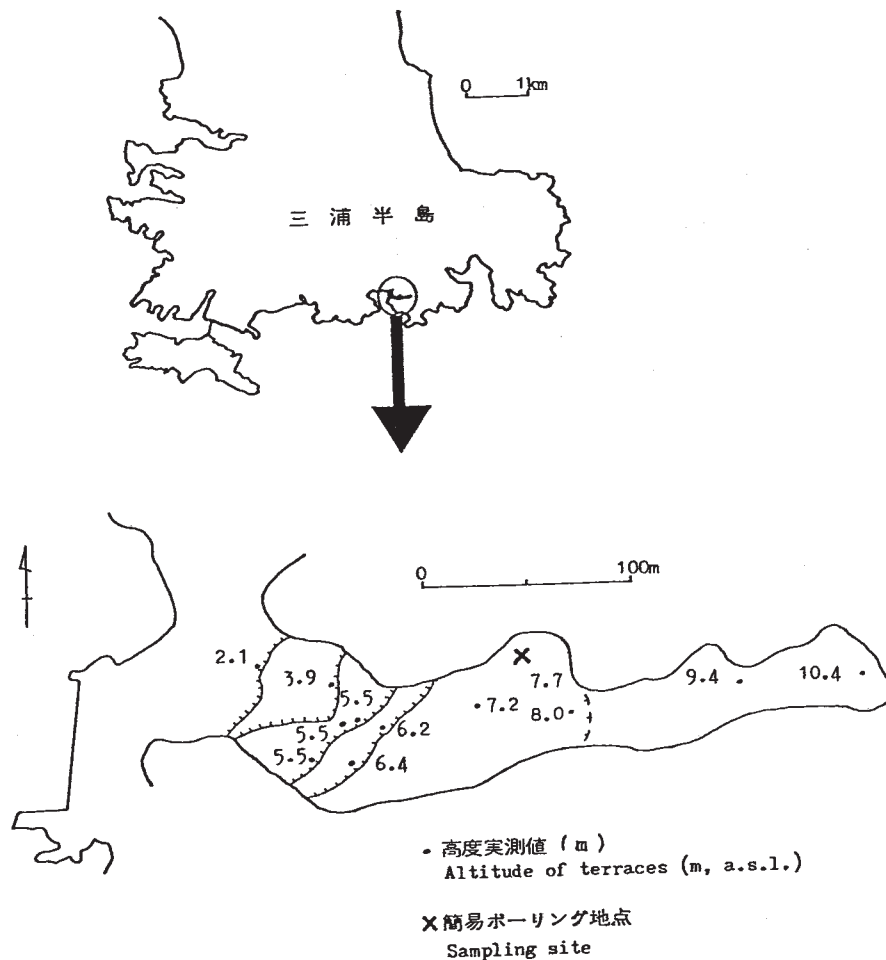
(北緯 35°08'17", 東経 139°39'27")

また、これとは別に、同じ層準の泥炭について東北大で年代測定をしたところ、ほぼ同じ測定値が得られている（菅沼 健, 私信）。従って、試料採取地点が陸化したのは約3000年前と考えられる。この時期は、古逗子湾の離水時期の一つ²⁾と一致するほか、房総半島南部で地震性隆起があったとされる2,850yr. B. P.³⁾にも近く、注目される。

聞き込みによって確認したところ、この谷の最も低い段丘面（標高2.1 m以下のもの）は、1923年大正関東地震で隆起・陸化したものである。この面を含め、試料採取地点以下には5段の段丘面が認められる（第1図）から、これらが地震性隆起によって生じたものであれば、段丘形成を伴うような地震は、平均して700～800年に一度の割合で発生したということになる。

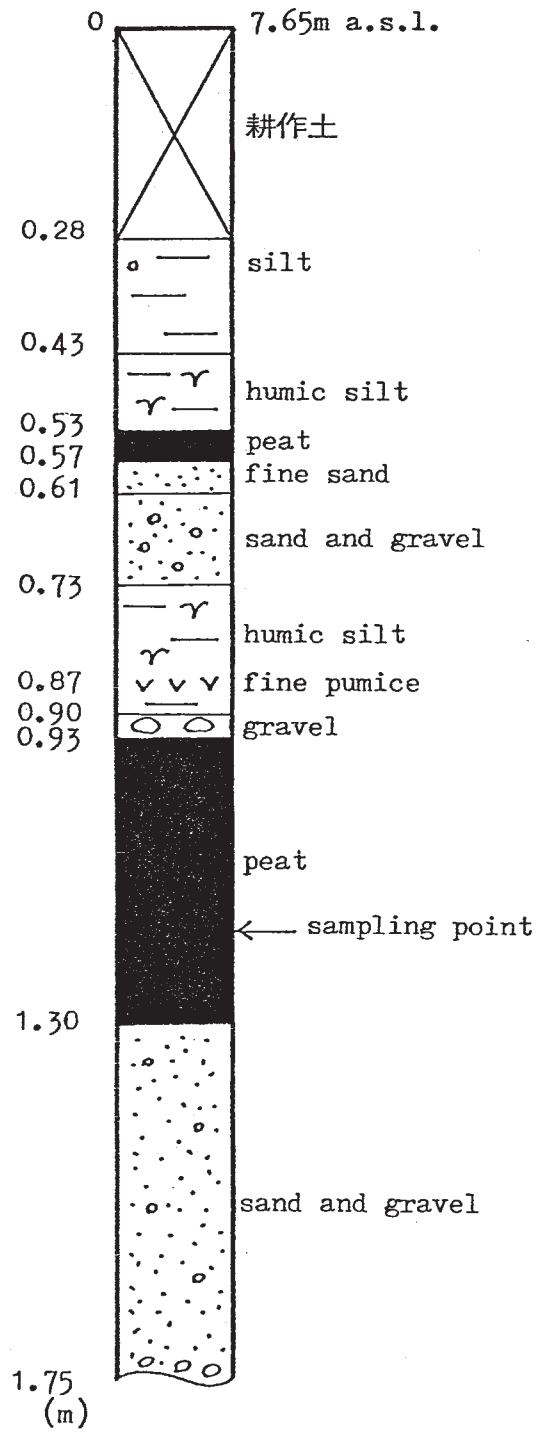
参 考 文 献

- 1) 国土地理院地理調査部・地殻調査部：三浦半島変動地形調査，連絡会報，**23**（1980），
26 - 28.
- 2) 中田 高・他（1980）：房総半島南部の完新世海成段丘と地殻変動，地理評，**53**，
29 - 44.
- 3) 松島義章（1980）：南関東における貝類群集からみた縄文海進と地殻変動，地球，**2**，
52 - 65.



第 1 図 調査地の位置および段丘面の分布

Fig. 1 The surveyed area and distribution of Holocene terraces.



第2図 ボーリング柱状図

Fig. 2 Columnar section at the locality showing in Fig. 1.